

平成二十九年 度

問題冊子

国	教
語	科
国	科
語	目
14	ページ数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

[1]

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

量子力学では、宇宙の基本的なバランスを崩す「無から生成した物質」は、——観測にかかることがない以上は——結局、観測者にとつては、存在していなかったこと(注1)になる。ところで、量子力学が発展しつつあったその時代、「存在していなかった」ことにされようとした人々がいた。ナチスがこの世界から抹消しようとしたユダヤ人である。

ナチスによるユダヤ人虐殺は、単なる敵の殺害を超えている。それは、殺害だけではなく、殺害の殺害をも含んでいたからである。すなわち、それは、ユダヤ人を絶滅させようとした事実そのものの徹底した隠蔽をも含んでいたのだ。ユダヤ人の絶滅収容所は、ドイツ本来の領土の外に置かれ、その敷地内で起きていることは、外部からはほとんどハアクできないようになっていた。虐殺にかかわる命令は、ごくわずかな例外を別にすれば記録に残されなかった。だから、戦後、たいていのドイツ人は、ユダヤ人の虐殺を見なかった、知らなかったと言ったことができたのだし、後には、「実証的な根拠」の不在を理由に虐殺の事実そのものを否認する歴史修正主義が登場する余地もあったのだ。虐殺が記憶されれば、仮にユダヤ人を全滅させたとしても、彼らがかつて存在していたという事実は残ることになる。もし、彼らの未来における存在だけではなく過去における存在も抹消しようとするれば、また彼らの事実的な不在だけではなく論理的な不在をも確保しようとするれば、^①虐殺が自乗化され、虐殺の記憶そのものが虐殺されなくてはならない。

ユダヤ人とは何であろうか？ ナチスは、なぜユダヤ人を恐れたのだろうか？ ここで深くは考察できないが、ユダヤ人についてのステレオタイプ(商人、高利貸し)から判断して、彼らが、資本主義(的な市場)の比喩であったと考えてもよいのではない。ところで、量子力学的な宇宙は資本主義と似ている。資本主義の下では、市場における最も基本的なバランスが崩される。価値の保存則が破られ、^(注2)等価交換を通じて——^(注3)——^(注3)どういいうわけか——剰余価値が発生するからである。言い換えれば、真空の揺らぎを通じて飛び出してくる、電子や陽子等の粒子は、エネルギー||物質の剰余価値のようなものである。ナチスが恐れていたもの、ナチスが死に物ぐるいで取り除こうとしていたもの、それは、「剰余価値の発生」に集約されるような、資本主義に本源的に

⑤ 姓_ハ金名_ハ彦_ト」

(范曄「後漢書」)

へ注V1 須臾―わずかな時間。 2 斤―重さの単位。 3 殯葬―葬儀。

川省にあった地名。亭長は十里ごとに置かれた宿場(亭)の長で、治安の維持などにあたった。王恽を大度の亭の長に任じたということ。 5 繡被―刺繡をした夜着(着物の形をした綿入りの布団)。 6 雒陽―現在の四川省にあつた地名。

7 悵然―茫然ぼうぼうとするさま。 8 卿―二人称代名詞、あなた。

問一 傍線部①をわかりやすく口語訳せよ。

問二 傍線部②について、主人が喜んでいる理由を具体的に説明せよ。

問三 傍線部③を書き下せ。

問四 傍線部④の問いかけに対し、具体的に回答せよ。その際「陰徳」の内容と、「二物」とは何を指すかを明らかにすること。

問五 傍線部⑤の伏線となっている一文を文章中より抜き出せ。ただし句読点や送り仮名は不要である。

[4] 王^{じほん} 屯^{とん}は都・洛陽に行く途中で、病に苦しむ書生に出会う。その場面に続く次の文章を読んで、後の問いに答えよ(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある)。

書生謂^{ヒテ}屯^ニ曰^{ハク}、「我^ニ当^ル到^ル洛陽^ニ而被^レ病^ヲ、命^ハ在^リ須臾^ニ。腰^ノ下有^ニ金^十斤^ニ、願^{ハクハ}以^テ相贈^{ラン}。死^後乞^フ藏^ニ骸骨^ヲ。」未^ダ及^バ問^ニ姓名^ヲ而絶^ユ。屯^チ即^ヒ鬻^ニ金^一斤^ニ、營^ニ其^ノ殯^ニ、余金^ハ悉^ク置^ニ棺^ノ下^ニ。人^無知^ル者。後^ル歸^ル数^ニ年^ニ、県^署屯^ヲ大^ニ度^ノ亭^長。初^メ到^ル之^日、有^リ馬^馳入^リ亭^中而止^ム。其^日、大^ニ風^飄。一^ニ繡^被被^レ復^タ墮^ル屯^ノ前^ニ。即^チ言^ヒ之^ヲ於^ニ県^ニ。県^以歸^ス屯^ニ。屯^後乘^リ馬^到雒^陽、馬^遂奔走^シ、牽^ヒ屯^ヲ入^ニ他^舎。主^人見^レ之^ヲ、喜^ビ曰^{ハク}、「今^ニ禽^レ盜^ヲ矣。」問^ハ屯^ニ所^ニ由^リ得^ル馬[、]屯^具說^ニ其^ノ状^ヲ、并^ナ及^ニ繡^被。主^人悵^然良^久。乃^チ曰^{ハク}、「被^レ隨^ニ旋^風与^レ馬^俱亡[。]卿^何陰^徳而致^ニ此^ニ二^物。」屯^自念^ハ有^ニ葬^ニ書^生二^事、因^リ說^キ之^ヲ、并^ビ道^ニ書^生形^貌及^埋金^処。主^人大^驚号^曰、「是^レ我^ノ子^也。」

内在するアンバランス・無秩序だったのではないか。そのアンバランスを体现し、アンバランスの原因と見なされた者、それがユダヤ人だったのではあるまいか。

マルクスは、『資本論』の有名な脚注の中で、王と臣下の関係を成り立たせている「錯覚」について論じている。臣下たちは、王がまさに王であるがゆえに、その王に従っていると思っているが、実際には、逆で、王が王でありうるのは、臣下たちが――まさに従うという行為を通じて――王を王として承認しているからだ、と。マルクスが指摘していることは、第一に、王と臣下の間に承認の循環があるということ(臣下がその承認を求めている王は、むしろ臣下による承認を通じて、王たる地位を得ている)、第二に、その循環の関係は、(当事者たちには)隠蔽されている限りで機能するという点、この二点である。

だが、民主主義社会に関しては、このマルクスの議論は妥当しない。民主主義社会においては、承認の循環は、思いっきり目いっぱい顕在化されなくてはならない。民主主義的な指導者や支配者は、人民の承認に依存してその地位を得ているということがあからさまになっても、決して失墜することはない。それどころか、人民の承認が、指導者や支配者の地位を正当化する唯一の根拠ですらある。指導者や支配者は、自分たちがいかに人民の承認に依存しているかを、一生懸命言い立てなくてはならない。簡単に言えば、王権を崩壊に導きかねないその同じ要素によって、民主主義は正当化されているのだ。

とすれば、王権の支配とは違って、民主主義には、それ固有の錯覚はないのか? 民主主義は十分に開明的な政体であって、無知や隠蔽、錯覚等によって支えられているわけではない、ということなのか? そうではない。民主主義を成り立たせている錯覚もあるのだ。ただ、錯覚は、王の支配の場合とは逆側にある。民主主義において、われわれは、支配者や指導者が、人民の意志を代表している(代表していない)、と言う。このように言うとき、単一の――あるいは少なくとも有機的な統一性を有する――意志を帰属させうる人民なるものの存在が前提にされている。そのような意志を有する、統一的で、秩序だったまとまりをもつ人民の存在が、自明の前提となっている。だが、われわれが人民なるものの統一的な存在を自明視できるのは、まさにそれが単一の支配者・指導者によって代表されているから――少なくとも代表されうる(と考えられている)から――である。人民の統一的な存在は、それを代表する指導者・支配者の単一性によってこそ構成されているのであって、それを八ナれてはどこに

も根拠をもたない。王権においては、王の本質的な存在ということが錯覚の対象で、その錯覚を構成している、見えない原因は人民の側にあった。民主主義では逆に、錯覚の対象は、人民の存在であり、その錯覚を構成している原因は支配者・指導者の側にある。

民主主義のこのような構成は、必然的に次のような結果を生む。人民の統一性が究極的には何の根拠もなく仮定されてしまうため、人民の統一性の中に回収できない他者、つまり指導者の支配に最小限の信頼すらもつことができないような「人民の敵」を、反作用として、析出してしまふのである。人民の統一性が予め存在あらかじしていて、指導者が選ばれているわけではなく（民主主義の支持者はそう信じているが）、実際には、指導者の存在を想定したことの容赦のない帰結として人民の均質的な統一性が構成されている。そのため、人民から排除される他者が不可避に残されてしまふのである。

ナチスにとってのユダヤ人とは、そのようにして人民から排除される他者の極端な一例ではないだろうか。^③ファシズムを民主主義と対立させる人がいるが、それは間違いである。実際、ヒトラーの支配は、民主的な体制の中から合法的に生み出されている。ファシズムは、民主主義の可能な帰結の一つと見なすべきである。総統フューラーの純粋なる単一性を措定したことの反作用として、ドイツ人民の統一性が構成され、同時に、そこから除外されるユダヤ人という像が結晶せざるをえなかったのだ。ユダヤ人がそのような他者の代表となったのは、先に述べたように、「人民」という統一性をハバむ最も重要な社会的要因が、資本主義のダイナミズムにあったからであろう。

ここで、再び、量子力学との類比的な関係を確認しておきたい。「人民の敵」というカテゴリーが結晶するのが、指導者の単一的な存在の反作用であったのと同様に、保存則を破る「存在すべきではない物質」が現れるのは、観測者の視点の単一性が設定されたことの反作用である。政治と量子力学の間に、このような同型性が見出されるのだ。

以上の考察から、「プロレタリア独裁」^{（注4）}というこの積極的な意義を逆照射することができる。「階級」は、「身分」の有機的なヒエラルキーの崩壊にこそ対応しているのであった。^{（注5）}とりわけ、プロレタリアートは、その崩壊を純粹状態において体现する。とすれば、プロレタリア独裁という構想が照準しているアイデアが浮上してくる。それは、述べてきたような民主主義の基本的な

問一 傍線部 a f の語句の意味を記せ。

問二 この作品は、後に回想して書かれたものと見られている。傍線部①「べし」が用いられていることと、この成立事情とは、どのように関わっていると考えられるか述べよ。

問三 傍線部②の歌を通して、この時の夫婦仲はどのようなものであったと推測されるか説明せよ。

問四 傍線部③を口語訳せよ。

問五 傍線部④。「つき葉の露」と対極にある表現を、問題文中から抜き出せ。また、「つき葉の露」とは、筆者のどのような心情を喩たとえているか説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

その前の五月雨の二十余日のほど、物忌もあり、長き精進もはじめたる人、山寺にこもれり。雨いたく降りて、ながむるに、「いとあやしく心細きところになむ」などもあるべし、返りごとに、

時しもあれかく五月雨の水まさりをちかた人の日をもこそふれ

とものしたる返し、

真清水のましてほどふるものならばおなじ沼にもおりもたちなむ

と言ふほどに、閏五月にもなりぬ。

つごもりより、なにごちにかあらむ、そこはかとなく、いと苦しけれど、さはれとのみ思ふ。命惜しむと人に見えずもありにしがなとのみ念ずれど、見聞く人ただならで、芥子焼きのやうなるわざすれど、なほしるしなくて、ほど経るに、人はかきよまはるほどとて、例のやうにも通はず、新しきところ造ると通ふたよりにぞ、立ちながらなどものして、「いかにぞ」などもある。こち弱くおぼゆるに、惜しからで悲しくおぼゆる夕暮に、例のところより帰るとて、蓮の実一本を、人して入れたり。暗くなりぬれば、まるらぬなり。これ、かしこのなり、見たまへ」となむ言ふ。返りごとには、ただ、「生きて生けらぬ」と聞こえよ」と言はせて、思ひ臥したれば、あはれ、げにいとをかしかなるところを、命も知らず、人の心も知らねば、「いつしか見せむ」とありしも、さもあらばれ、やみなむかしと思ふもあはれなり。

花に咲き実になりかはる世を捨ててうき葉の露とわれぞ消ぬべき

など思ふまで、日を経ておなじやうなれば、心細し。

〔蜻蛉日記〕

- 〔注〕 1 人―筆者の夫である藤原兼家。
- 2 芥子焼きのやうなるわざ―真言宗の行法。
- 3 きよまはる―潔斎をし
- ていること。
- 4 新しきところ造る―東三条邸の改築造営か。
- 5 さもあらばれ―さもあらはあれ。

前提―ファシズムへの転回の要因ともなっていた前提―を全面的に否定するものである。すなわち、プロレタリア独裁とは、「人民」なるものが実体的な統一性をもつては存在していないということ、この点にこそ照準した独特の民主主義なのである。

つまり、こういうことだ。「プロレタリア」とは、社会システムの中で必然的な位置づけをもたない排除された部分の代名詞である。それは、「人民」の統一性を不可能なものとする要素である。つまり、ナチスが「ユダヤ人」にトウエイしたのと正確に同じ場所が―「人民に対する他者」としての場所が―、プロレタリアにはあてがわれているのだ。この排除された他者を、民主的な意思の代表と見なしてしまうこと、つまり社会的な普遍性の代理人とすること、これがプロレタリア独裁という構想の基本的な狙いである。マルクスの『ヘーゲル法哲学批判』の有名な文章こそ、ここに置き直すに値するだろう。

それでは、ドイツの解放の積極的な可能性はどこにあるのか。解答。それはラディカルな鎖につながれた一つの階級の形成のうちにある。市民社会のどんな階級でもないような市民社会の一階級、あらゆるシュタント(身分)の解消であるような一シュタント、その普遍的な苦悩のゆえに普遍的な性格をもち、なにか特殊な不正ではなくて不正そのものをこうむっているためにどんな特殊な権利も要求しない一領域……(中略)ひとこといえば、人間の完全なソウシツであり、したがってただ人間を全面的に救済することによってのみ自分自身を達成することができる領域、そういったひとつの領域の形成のうちにあるのである。こうした解消をある特殊なシュタントとして体现したもの、それがプロレタリアートである。

だから、プロレタリア独裁という名の民主主義は、通常の民主主義とは正反対である。普通は、民主主義は、人民を構成する諸個人の意思の何らかの意味での平均値的な集約をもって普遍性の代理物とする。それに対して、プロレタリア独裁は、人民から排除されている部分だけを普遍性と等値する。だが、他方で、このような逆説的な民主主義こそは、本来の民主主義だと見なすこともできる。二つの点において、そう主張することができるだろう。第一に、民主主義 democracy とは、demos の支配という意味であり、demos は、古代ギリシアのポリスのハイアラキーから排除されていた大衆のことだからである。つまり、

ボリスにおける demos の地位は、資本主義的な社会におけるプロレタリアに比することができるのだ。第二に、民主主義は、一般に選挙という手法に依存するが、選挙においては、人民は、単なる諸個人の集まりにまで解体されており、実体的な統一体としての人民は、少なくともこのときには無化されているからだ。

(本文は、大澤真幸『量子の社会哲学 革命は過去を救うと猫が言う』に基づき、「一部省略した箇所がある。」)

〔注〕 1 筆者は、問題文より前の部分で次のように述べている。「量子力学の理論によれば、宇宙を普遍的に支配する法則、宇宙の基本的なバランスは、実際には、始終、破られている。エネルギー保存則を無視して、真空から、電子や陽子のような物質が——まるで手品師の空っぽの帽子から鳩やウサギが飛び出すように——ポンと出てくるのである。これを「真空の揺らぎ」と呼ぶのであった。ただし、このような奇妙な現象は、観測者が観測していないときにか起きない。いったん無から生成された物質は、観測者が——周囲が——アンバランスに気づく前に、無へと直ちに回帰してしまう。結局、無から飛び出した電子や陽子たちは、観測者の眼には、「存在していなかったことになる」。

観測されている限りでは、普遍法則(エネルギー保存則)は、まさに普遍的に妥当するのである。」

2 等価交換——等しい価値を有するものを相互に交換すること。

3 剰余価値——労働者の生活に必要な「必要労働」を超える「剰余労働(不払労働)」により生み出される価値。

4 プロレタリア——個々の労働者。プロレタリアートは労働者階級。

5 筆者は、問題文より前の部分で次のように述べている。「マルクスが、「身分」ではなく「階級」を採ったのは、(中略)プロレタリアートが、身分の秩序の解体をこそ表現しているからである。身分は、個人とその社会的姿形の間、有機的な秩序に従った必然的な繋がりがあることを含意している。それに対して、階級は、各個人が帯びる社会的条件の偶然性をこそ意味している。その偶然性を、完全に生の状態なまで具現している階級が、プロレタリアートである。階級という規定は、社会の統一的な秩序の不在に対応した用語法なのだ。」

6 ハイアラキー——階層構造の組織。ヒエラルキー。

〔注〕 1 気象隊——気象を観測する班。「私」は無線機を借りるため、附近の気象隊に毎日一回出張していた。

2 部隊換字表——大隊間の連絡に用いられる暗号を印刷したもの。

問一 傍線部①②の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①「夢想家たらんが私の決意であった」とあるが、どのような「決意」であり、それについて「私」はどのように考えているのか。わかりやすく説明せよ。

問三 傍線部②「これが私の復讐であった」とあるが、「私」はなぜこのように思ったのか。具体的に説明せよ。

問四 傍線部③「彼は依然として何かの犠牲者であることはかわりない」とあるが、筆者は中山をどのような人間と考えているのか。簡潔に説明せよ。

私の楽観説には一人の相棒があった。この人物についてはSという名で屢々他の作品で書いたからここでは繰り返さないが、とにかく山へ入ってから、私はインテリ中山とまことしやかな話をするのが面倒になり、専ら呑気なSとつき合っていた。二人の呑気な様子は中山の注意を惹いたと見え、或る時声をかけた。

「まったく君達がそうやってつながつて歩いてるところは弥次喜多そっくりだな」

彼の表情は弱かった。私は彼の何かものいいたげな様子をわざと無視し、ただ笑って遠ざかった。これが私の復讐であった。彼がやがてマラリヤで倒れ、一月二十四日の敵襲に先立って死んだのも、過労からであることは間違いない。その時はしかし弥次さんたる私の方でも発熱していて、足が立たず、見舞うことは出来なかった。彼の分隊の兵士が私の寝ているところへ来て伝えたところによると、彼は死に際に私とSの名を呼んだそうである。

彼が何故私達を呼んだかは不明であるが、もし私達の呑気さが彼の絶望した眼にそれほど頼もしく映じていたとすると、私が最後に彼を突き放したのは悪いことであった。

とにかく、こうして中年の会社員の智慧によつて軍隊で出世した彼は、そのため死期を早めた。しかし今私が生還しているのは別に出世しなかったためでもなければ、山中で楽観的であったためでもない。Sも死んでいる。

中山の会社員氣質を私は幾分意地悪く書いたような気がする。それは多分今なお私の内にある会社員氣質と、文学という悪い根性のさせる業である。彼が悪劣に戦った日本陸軍の犠牲者であることはいうまでもないが、仮りに生還していたとして、彼がやはりあの陰惨な会社員の政治学を押し進める他はないとすると、彼はやはり不幸である。彼は依然として何かの犠牲者であることはかわりない。

彼は結局その皮膚が女のように柔らかいように、心も優しくしたのであろう。状況が絶望的になると、不意に私に優しくなったのがその証拠である。軍隊で出世しようと思つたのも、単なる防禦にすぎなかった。要するにこれは一個のおとなしい男であった。

中山の霊よ安かれ。

(本文は原則として「大岡昇平全集」による)

問一 傍線部⑦⑧のカタカナを漢字に直せ。

問二 ナチスのユダヤ人虐殺について、傍線部①「虐殺が自乗化され、虐殺の記憶そのものが虐殺されなくてはならない」とあるが、どういうことか。また、筆者はそうなってしまった原因を資本主義の何に求めているのか、わかりやすく説明せよ。

問三 傍線部②「王権を崩壊に導きかねないその同じ要素によつて、民主主義は正当化されているのだ」とあるが、なぜそう言えるのか、説明せよ。

問四 傍線部③「ファシズムを民主主義と対立させる人がいるが、それは間違いである」とあるがなぜか。筆者の考えを述べよ。

問五 傍線部④に「人民」なるものが実体的な統一性をもっては存在していない」とある。「人民」の「実体的な統一性」に基づかないのに、なぜ「プロレタリア独裁」が「民主主義」として評価できるのか、文章全体の論旨を考慮して筆者の考えを説明せよ。

〔2〕

次の文章は、大岡昇平「暗号手」の一節である。太平洋戦争末期、「私」はフィリピンに暗号手として出征している。暗号手は比較的楽な任務であったが、代理を育てるため「中山」という鉱業会社の課長であった兵士を推薦した。中山は上官に金を渡すなど要領よく立ち回り、いつしか「私」の地位を脅かすようになった。これを読んで、後の問いに答えよ。

我々の間はだんだん気まづくなつた。しかし夜は日夕点呼を免れられるという理由から、衛兵にでもつかない限り、一緒に〔注〕気象隊へ行ったが、気象隊の友人に対する彼の態度にも、何処か私を押しつける風があつた。衛門の出入は二人の一人が号令を掛けて歩調を取るのであるが、門まで来ると彼は必ず私の右側へ廻つて自分で号令をかけた。

私が代用品をつくる時考えた①「**危惧**」は実現したのである。しかも私の選んだのが、正確に私が捨てようと決心した社員〔注〕の智慧を、積極的に活用しようとしている人物で、私が直接その被害者とならねばならなかつたのは皮肉であつた。②「**夢想家**たらんが私の決意であつた以上、私に別に不服をいう筋はないはずであつたが、しかしなんとなく面白くなかつたのは事実である。

もつとも私の決意もあまりあてにならない。何かあるととかく自分の決意を自分に納得したがるのは私の癖であるが、これが一種の自己欺瞞〔注〕にすぎないかも知れないのである。例えばこの場合私の夢想家の決意にしても、必ずしも自発的なものではなく、自分がうまく軍隊の仕来りに順応して行けない事実の反応にすぎないのかも知れない。結局私は押しつめられて初めて決意するわけで、すべては私の怠惰と愚図から出たとするのが正確であろう。

しかし私は或る時本気で中山に忠告した。

「おい、君はそうやってうまく立ち廻る気がしいが、実はつまんないんだぜ。レイテはどうやら負け戦だし、どうせ俺達は助からないんだ。株を上げると却つて身体を使わなきゃならねえのは、会社も軍隊も同じことさ。いい加減に投げ出して呑気にやるもんだよ」

十九年十二月十五日、米軍が上陸した三日前から私はマラリヤで発熱していた。十四日バタンガスの大隊本部へ出張していた給与掛の軍曹が帰つた。連絡船はB24の掃射を受け、兵一名が負傷していた。

夕方中山が妙に優しい顔をして私の寝ている班内に入つて来た。私が何かニュースはないかと訊くと、彼は意味ありげに笑つて、

「病人のうれしがるニュースはないが、とにかく、だんだん君のいつた通りになつて来たんだよ」といつて去つた。

後で彼の告げたところによると、給与掛は「兵隊には黙つてろ」といつて、大隊副官から申し渡されたことを伝えたが、副官はレイテの戦局が絶望なること、米軍の次の上陸地点は多分このサンホセなること、上陸しても援軍は出せないから善処〔注〕して貰いたい、といったさうである。大隊本部は自隊の防禦陣地構築で忙がしかつた。

翌十五日米軍上陸の日私はまだ発熱していたので、「〔注〕部隊換字表」の携行、書類の処分等は中山に任せた。中山は暗号関係の処置をすませた後も、特に給与掛の軍曹に命ぜられて、種々後始末のため残らねばならなかつた。軍曹と二人で先発した部隊を追いながら、このちよつとの遅れのため、ゲリラに襲われるかも知れないという恐怖が彼を捉〔注〕えたさうである。その時、「軍隊で株を上げるな」という私の忠告を思い出したと、後彼は私に洩らした。

翌日気象隊では山路運搬不能の通信機と暗号書を焼いたので、私達もそれに倣つた。大隊本部に送る最後の電報を私は病を押して作業した。組立終つた数字を中山に口述しながら、私の声は涙で詰つた。とにかくこれは私がこれまで、他人のために真剣に従事した唯一の仕事であつた。中山は笑つて「よこせ」といつて私から草稿を取り上げ、ひとりで写した。

二日の後東海岸ブラカオ背後の山中で、同地の警備小隊と連絡し露営した。上等兵勤務の中山は斥候などによく選ばれ、〔注〕屢々サンホセ方面に偵察に赴いた。また衛兵司令にもついで、「疲れる疲れる」とこぼしていた。

山の中へ入つてから前途の予測について我々の意見は逆になつた。今度は彼が悲観的になり私が楽観的になつた。彼は北部の東海岸にも米軍が上陸して退路を断られたのを、我々の死の決定的な徴候〔注〕と考えていたが、私の意見ではもともと日本軍のいなかった西海岸は、向うの警備も手薄なはずで、そこから船でボルネオへ逃ればいいのであつた。

これはまず実現不可能の空想にすぎなかつたが、私の考えでは、いずれにせよここまで押しつめられた以上、悲観してみても始らないのである。